

今日のみことば

□ 7月8日(日) 歴代誌上 23章

ダビデはその子ソロモンを王とした。それに次いで新たに建てようとしている主に宮に仕えるレビ人に、さんびの奉仕をすることは使命であった。

□ 7月9日(月) 歴代誌上 24章

ここには「アロンの子」である祭司たちが、24の組に分けられた。その結果、祭司は年に一ヶ月あるいは二週間の当番で各奉仕にあたることになった。

□ 7月10日(火) 歴代誌上 25章

主の宮も礼拝について歴代誌はよく記している。音楽を礼拝で用いることについて記されている。神が与えられてものはずべて神のために用いられてこそ意義があるのです。

□ 7月11日(水) 歴代誌上 26章

次に「門衛」「宝物倉」係、「外の仕事」などの奉仕が取り上げられている。どの分野の働きも神の栄光を表死、神をほめたたえるものです。

□ 7月12日(木) 歴代誌上 27章

ここには軍の組織と各種のかしらたちについて記されている。悪霊との戦いに挑む私たちには、その戦いのために組織化は重要である。総司令官キリストの下にたてられるのです。

□ 7月13日(金) 歴代誌上 28章

すべての準備が整えられてダビデは各部門の指導者たちを呼び集め、彼の子ソロモンによって主の宮を建てるようにと、神の導きがあったことを語った。

□ 7月14日(土) 歴代誌上 29章

最後にダビデは主をほめたたえて祈ります。壮大な祈り、謙遜の祈り、喜びの祈りです。全会衆に賛美と礼拝を呼びかけます。ダビデ物語は感謝の献身に満ちて閉じられます。

ろ ば No. 1875
2018年 7月 8日
日本バプテスト 立川キリスト教会
牧師 大川 博之

ロマ 3:10-11

正しい者はいない。一人もいない。悟る者もなく、神を探し求める者もない。

「正しい者はいない。一人もいない。悟る者もなく、神を探し求める者もない」(3:10-11) この言葉は、私たちがしっかりと聞かねばならない言葉です。滅びるべき私たちが、いのちに生きるために神は、御子・独り子なるイエスを十字架につけられました。そこまでして、神は私たちを生きるものとされたいのか。それは神が私たちをどこまでも愛し抜いておいでだからです。私たちはそのことをどこまで受け止めているのでしょうか。パウロはロマにいるクリスチャンたちにその思いを語ります
私はいまこそしっかりこの手紙で指摘されるものを受け止めさせていただくかねばと聞かせていただ

くのです。「なぜなら、律法を実行することによっては、だれ一人神の前で義とされないからです。律法によっては、罪の自覚しか生じないのです」(3:19)。この手紙での指摘は、ユダヤ人を対象としたものでも、異邦人を対象としたものでない。神には、罪についても救いについてもすべてのものが対象でした。「ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されましたすなわち、イエス・キリストを信じることにより信じる者すべてを与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。」(3:21)と。

本当に私たちは、この自分が何者であるかを知っているのでしょうか。自分は正しく生きてると、ほとんどが自負しています。しかし神は違うと言われる。パウロはここでそのことを

私たちに告げるのです。しっかりとパウロが告げる言葉を聞き取らせていただくことができなければ、私たちはいのちへと生きることはできないのです。マルティン・ルターはこの三章について「ここに記されていることに注意せよ。これはこの書、いや全聖書の中心と見てよい。もっとも重要な部分である」と言います。私たちはそこに何をみているのでしょうか。「正しい者はいない。一人もいない。悟る者もなく、神を探し求める者もいない」です。

よほど道徳的な生活を営んでいるかに見える人も、その実、神の前においては五十歩、百歩の相違があるだけであって、同じように罪人なのです。「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。」(3:22-25)とあります。

私たちは、みな罪人です。どれほど、身を削るほどの努力をしたところで何の助けにもなりません。救いは神から来るのです。しっかりと心に刻み付けるべき言葉です。「わたしたちは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです」(3:28)。「事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。」(エペソ2:8)とある通りです。

本当に私たちが願う幸せがどこにあるか。それはイエス・キリストにあります。私は今日の世界中の人たちが、十字架のイエスをしっかり見つめることなしには、平和は訪れてはこないと言わせていただかねばなりません。それは神の恵みだからです。

次週の聖書・説教

ロマ4:1-25

恩恵による救い

聖書の学び・祈禱会

創世記18:16-33 とりなしへの招く神

「ドソドムとゴモラの罪は非常に重い、と訴える叫びが実に大きい」と言われた神は、それを確認のために下られたが、そのことを「主は言われた。『わたしが行おうとしていることをアブラハムに隠す必要があるうか。』」と。それは神の憐れみ心の表現でした。ソドムとゴモラの重い罪に関して、神がアブラハムに気遣いをされる必要はありませんでした。神の言葉に立ち続けるアブラハムに、神は声をおかけになりました。

そこからアブラハムの猛烈なとりなしの祈りが始まります。それはあまりにも厚かましいアブラハムの願いでした。神はそれをしっかりと受け止めて下さいました。彼は五十人から始めて十人についてまで祈りました。それで彼はやめてしまいました。彼がやめると主も去って行かれました。彼はもっと祈るべきでした。とりなしの祈りは、神が働いてくださるまでやめてはなりません。



Read God's Word.